

開催地名：北海道苫小牧市	
開催日時	令和2年1月30日（木） 10：00 ～ 12：00
開催場所	苫小牧市役所
語り部	武蔵野 美和 （岩手県陸前高田市）
参加者	市民、自主防災組織、企業（事業所）の防災・安全管理実務者 約70名
開催経緯	当市では、東日本大震災を教訓に、北海道が作成した太平洋沿岸における最大クラスの津波を想定した「津波浸水予測図」を参考にし、平成25年に「苫小牧市津波ハザードマップ」を策定するとともに、防災訓練と併せて地域防災力の強化や防災意識の向上を図ってきた。しかし、過去に大規模かつ広域的な津波被害の経験がないことから、東日本大震災を経験した語り部を介して、大震災の教訓を風化させることなく、苫小牧市民全般に災害伝承することが急務となっている。
内容	（１）はじめに 私が住む陸前高田市は、岩手県南部の太平洋側に位置している。岩手県の中では比較的温暖な地域で、東北の湘南とも呼ばれている。この陸前高田市は、東日本大震災で津波による甚大な被害を受け、町が壊滅してしまった。本日は、生活者の視点での避難所運営についてお話しさせていただく。 （２）東日本大震災の被害状況 三陸沿岸は、昔から津波の被害を受けてきた。さかのぼれば、明治三陸大津波や昭和三陸大津波、チリ地震による津波の被害が有名である。これらの津波被害を受けて対策が講じられ、また、情報網が整備されていたにも関わらず、東日本大震災では多くの犠牲者を出してしまった。市内の公共施設についても、市庁舎や図書館、体育館、公民館、小中学校や保育所等々の多くの施設が全壊してしまった。陸前高田市においては、人口24,246名のうち、死者・行方不明者は1,757名にのぼる。 東日本大震災の際、陸前高田市では、地震の揺れはじめてから津波が到達するまでに40分あった。その間に逃げた人は助かったが、逃げなかった人は命を失った。残念なことは、市民体育館、市役所、市民会館など指定避難所になっていた場所で多くの犠牲者が出たことである。そこに行けば大丈夫だと思って逃げ込み、安堵していた人たちが、ひとたまりもなく亡くなってしまったのである。もちろん行政は、ハザードマップやマニュアル作成など、事前に防災対策を講じていた。このことから、災害に関しては、「自分の命は自分で守る」ということが鉄則であると肝に銘じてほしい。 （３）避難とは

陸前高田市では、避難場所の半数以上が被害にあった。一部の地区では、訓練時に使用していた地区防災センターに多くの方々が避難したが、実は防災センターは指定避難所ではなかった。そのため、避難所だと思い込んで避難してきた方々の多くが犠牲になってしまった。皆が逃げることができなければ、避難とは言えない。要支援者を含んだ避難訓練を日頃からしているだろうか。陸前高田市ではそのような訓練が行われていなかったために、多くの犠牲を出してしまった。日頃から「万が一」を考え、自分の命を守るための「備え」を意識していただきたいと思う。

また、避難と避難所へ行くことは同じではない。身の安全が確保できるのであれば、とどまることも重要であり、ストレスが大きい場所にあえて行く必要はない。家が安全であれば、家にとどまっていて問題ないのである。究極の防災は、逃げなくても良いところに住むということだ。

(4) 避難所について

避難所に避難しても、アレルギーがあって配られたパンが食べられないという子どももいる。また、高齢者や、介護が必要な人を抱える家庭もある。それぞれの家庭によって、いざというときに必要な準備が違う。食料の備蓄はもちろん、避難リュックの中身の点検も欠かせない。リュックは取り出しやすい所に常備しておく。また、災害にどこで襲われるか分からない。職場や学校、交通機関など、どこで被災しても、命を守るために必要な物はいつも持って歩いてほしい

災害時に必要な各種備品（懐中電灯、充電式ラジオ、ラテックス手袋等）を備蓄するとともに、食料品や日用品については、少し多めに購入し、日常生活で消費した分を補充する「ローリングストック」方式をお勧めしたい。

守りたい人がいるなら、まず自分の身の安全を確保することを意識していただき、救助される側から救助する側になれるように意識した準備を行っていただけたら幸いである。



開催地より

東日本大震災の体験談、教訓について、わかりやすくお話しいただいた。「避難」についての認識を深めることができたと思う。